

各地の取り組み 奈良県葛城市

指導しない・受け入れる支援をめざして

葛城市子育て支援センター 保育士 松浦 幸恵

子育て支援との出会い

私は市内公立幼稚園で27年間勤務した後、平成19年4月に子育て支援センター立ち上げに伴い人事異動となり、新庄健康福祉センター内に勤務し、子育て支援に携わることとなりました。今までは、幼稚園での勤務ということで子どもの特性（持ち味）を“引き出すための保育”を提供していた時の職場環境とはがらりと変わり、すべてが初めてのことで何からすべきか非常に戸惑いました。

子育て支援は親の子育てを受け入れながら、主に未就園児親子の子育てに必要ないろいろな情報の提供と居場所の提供ということで、“指導しない・受け入れる支援”を中心に、親子が家に閉じこもらず少しの時間でも出てこられるように『つどいの広場』を開催し、親子にかかわりを持ちながらの支援を続けてきました。

当時は職員3名でスタートしました。手探り状態の支援から、地に足をつけた支援ができるようにと相談員を配置してもらい、現在職員は保育士の資格を持つ職員5名で子育て支援をしています。

子育て支援センターの事業内容

現在は、未就園児親子が自由に遊びに来ることができる「つどいの広場」を週3回 午前9時30分～午後3時まで実施しており、日々平均25組ぐらいの親子が集まり、親子でのかかわりを楽しんだり、参加者同士子育て等について交流をしたり、スタッフに子育てに関する悩みを相談したりするという支援を行っています。このつどいの広場は市内3か所と毎月1回ですが、市内の福祉施設の空き部屋を利用して「おでかけ広場」も実施しています。

また、毎月1回年齢別つどい（0・1・2歳児）をしており、年齢別つどいは、同い年の子どもをもつ親子が集まり交流しながら、同じ年だから思う子どもの育ちや悩みなどの情報交換をする場を提供しています。子どもを遊ばせながら母親同士交流する時間を設けたあと、保育士がそれぞれの年齢にふさわしい経験ができるように親子のかかわりを目的とした手遊び・ふれあい遊び・活動などを提供し、親子でゆったりかかわる時間を過ごしてもらえるようなカリキュラム“保育ではない支援”を実施しています。

最初の頃は0歳児の年齢別つどいはしておらず、0歳児の親子こそ交流できる機会が必要と思い、平成23年度より0歳児年齢別つどいを始めました。特に0歳児は、親子のかかわりが十分に深められるように抱っこしてもらいながら遊び、からだを一杯さわってふれあってもらえるような遊び



をしたり、活動として『ベビーマッサージ』『布を使っての遊び』『ふれあい遊び』などを経験してもらっています。

年齢別つどいの参加登録者は、未就園児の45%ぐらいですが、毎回の参加者は40～50組前後です。年齢別つどいは、地域ごとに分けて2か所で実施しています。年齢別つどいに参加することでお母さん同士が仲良くなり、誘い合っつどいの広場に参加したり、また、その逆で年齢別つどいに誘い合ったりするケースも見られます。参加者には子育てのヒントとなるような「子育てワンポイントアドバイス」やその月に楽しんでもらったふれあい遊びを掲載したおたよりを発行しています。

毎月2回実施、集団経験の必要性を伴う支援として3歳児子育て教室を実施しています。最初は、親子で楽しめる活動を選び楽しんでもらいながら、慣れたころより（7月頃）母子分離をし、先生や友だちと一緒に楽しめるような保育をし、母親は別室で手作りおもちゃを作ったり、おやつを作ったり、子育てに関する講習会で話を聞くなどして母親同士の交流をもっています。

B Pプログラムとの出会い

このような子育て支援をする中で、初めての赤ちゃんを持つ方の支援ということで、平成23年3月に“こころの子育てインターねっと関西”が初めて実施されるB Pプログラムのファシリテーター養成講座があることを知り、保健師の松山神恵さんと一緒に受講しました。初めての講座でもあり興味を持って話を聞きながら、「初めて子育てする母親の支援になるんだな」というぐらいしか思っておらず、「慌てなくてもまたいざすれば良いか」としか思いませんでした。B Pのことはいつも頭の片隅にあり、受講してから8か月後、せっかく受講したのだから「一度やってみよう」と保健センターにB Pプログラムの説明をし、保健師に参加者を集めてもらい、平成23年11月に葛城市で初めてB Pプログラムを実施しました。

今でもつながりが深いB P 1期生

参加者は14名と初めて実施するには、やりやすい人数でした。参加者も初めて、実施する私たちも初めてということで緊張と戸惑いが交差しながら、参加者を温かく迎えました。赤ちゃんを抱いて緊張しながら来てくれた参加者は、プログラムが進むうちに顔の表情も明るくなり、“みんな一緒なんや”“私だけじゃないんだ”と感じ取ったのでしょう。会話も弾み、帰るころにはすごい笑顔で、「来週また来ます！」と参加した人と一緒にしゃべりながら、楽しそうに帰って行きました。4回のセッションが終わる日『今日で最後なんですね。淋しいですね。何かみんなとつながっている方法ってないですか』と声が聞かれ、サークル活動を勧めました。毎月1回サークル活動をし、子育て支援センターが実施している、つどいの広場や年齢別つどいにも参加してくれました。その参加者たちのお子さんは今年度3歳児となり、今年春からは幼稚園に入園する年齢に到達しています。今でもつながりが深いし、私も1期生のB P修了生を見るたびに、お互い親しく声を掛け合っています。



参加者からは、「子育ての正しい知識を教えてもらったことで、子どもの見方や接し方が良い方向へ変わり、親の気持ちも楽になった」「小さいうちのかかわりが思春期につながるということを知って、抱っこすることとただ抱くというのではなく気持ちをこめるようになった」「今までは子どもと二人きりで外出したことがなかったが、参加することにより行動範囲が広がった。育児が楽しくなれそう」「参加することによりママとしても成長できた」と、プログラムに参加しての感想が聞かれ、初めての子育てに対する不安も緩和できているように思われます。また、『子育てしているのは一人じゃないんだ』と思うことで、初めての子育てに対する不安も緩和でき安心して子育てができるのではないかと推測できます。

参加者が1回参加するだけで、帰るときには、ホッと安心した表情になった姿を見るとB Pプログラムを実施してよかったと感じるし、構造化されたB Pプログラムの不思議・魅力を感じるの私だけではないと思います。その後1年に4回のペースでB Pプログラムを実施し、第1子出生数の43%が参加してくれたことになりました。

また、このプログラムに参加することで家に閉じこもらずに赤ちゃんと一緒に外に出かけるきっかけとなればと実施しています。そしてB Pプログラムを続けることで、参加者は子育ての知識の学習をしながら子育てのなかま作りを通して孤立感から開放され、そのことで子育てに安心感も生まれ育児に自信が持てるようになってきています。

第一子の親子すべてが参加できたら

B Pプログラムを続けるうちに育児不安の軽減と虐待の予防にもなり、やがて思春期を迎える子

どもの人格形成につなげるためにも親支援を続けられたらという思いから、葛城市の第一子の親子すべてがB Pプログラムに参加することができたらという思いに駆られました。葛城市でファシリテーターを養成し、プログラムの回数を増やしたり、またいろんな場所でこのプログラムができたら良いなと思い始めたころ、ちょうど国の地域少子化対策強化交付金の申請があることを知りました。全額補助をしていただけるということで申請をさせていただいたところ、交付金が決定となり、平成27年2月に、葛城市で養成講座を実施することにしました。

養成講座開催について市広報に掲載したところ、受講者が集まるかどうかすごく心配でしたが、養成講座には規定の24名の受講者が集まり、キャンセル待ちが出たほど人気がありました。それだけ関心があるんだと募集をして改めて、B Pプログラムに参加する方も、ファシリテーターとして実施する方にも魅力があることに驚かされました。受講者は市の職員もいますが、一般市民の方もおり、保育士・保健師・幼稚園教諭・助産師・民生児童委員・役所の子育て支援関係の管理職も受講してくれました。

受講した人がファシリテーターとして活躍できるように、平成27年度から葛城市子育て支援センターで実施しているB Pプログラムの進行をしていただくことにしました。今年度に入って4回実施し、ファシリテーターとして認定された方が3名おります。実際にプログラムを実施された方は、「養成講座は身内の中で安心して受講できましたが、実際にしたプログラムでは、赤ちゃんもおり何が起きるか想定できない中で実施したので、ハラハラ・ドキドキでした。でも参加者の笑顔を見るとB Pプログラムをしてよかったと思いました」と感想を聞かせてくれました。

B Pプログラムの募集に関しては、対象者にチラシを配布し、保健師により勧誘もしてもらっています。葛城市子育て支援センターは、健康福祉センター内にあるということで、保健師と連携をとりあうことができるので、子育て中の親子に子育て支援事業やB Pプログラムに誘ってくれたりしてくれます。また、子育て支援事業に参加した親子の状況を保健師に伝えたりしたりできるのが、葛城市子育て支援センターの強みでもあります。

今後もB Pプログラムに参加したことをきっかけに、子育て支援センターが実施する事業に誘い、子育て中の親子が笑顔で子育てできるように支援を継続していけたらと思っています。また、子育て支援事業に参加している親子に関しては何らかの支援ができますが、出てこない方に関して、少しでも家から・自分の殻から出てこられるように啓発していきたいとも思っています。

こんな素晴らしいプログラムに出会えたことを嬉しく思います。